様式３－６　　【新規】H.２９～H.３０

教育課程研究指定校事業実施計画書（平成２９年度）

― 研究課題３（３）論理的思考 ―

都道府県・指定都市番号	５５	都道府県・指定都市名	新潟市

１　研究指定校の概要

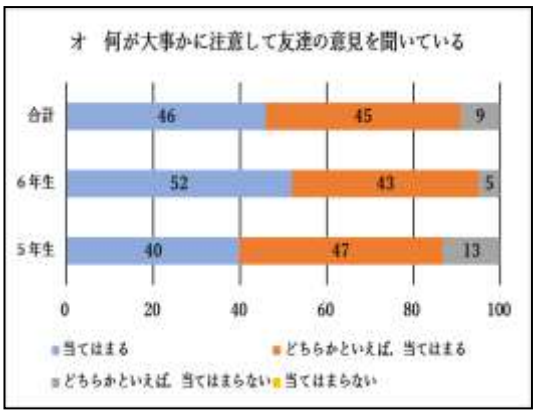
ふりがな 学校名	にいがたしりつにいがたしょうがっこう 新潟市立新潟小学校							ふりがな 校長氏名	こんどう　あきら 近藤　朗
所在地	〒951-8106　新潟県新潟市中央区東大畑通１－６７９ 電話(025)228-3059　FAX(025)228-0189　e-mail　e305tanpopo@city-niigata.ed.jp								
(H29.4.1 見込)	１年	２年	３年	４年	５年	６年	計	(H29.4.1 現在) 教員数　３３名	
学級数	4	3	3	4	3	3	２０		
児童数	９７	８８	９２	１０５	９９	１０１	５８２		
特記事項	他に特別支援学級３学級・児童数１３名								

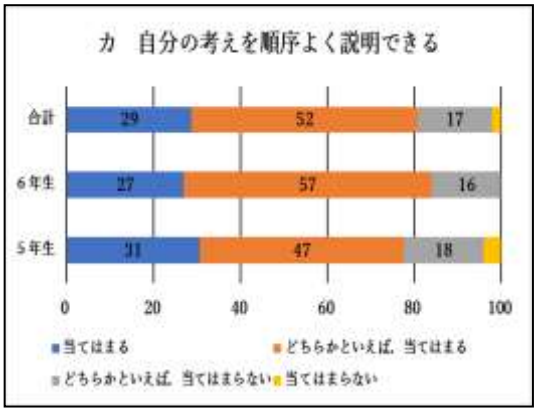
２　研究主題等

学校における研究主題	主体的に聴き、自分の考えを深め、広げていく子どもの育成
研究主題設定の理由	これまで、わたしたちは課題解決的な指導を行ってきた。子どもの姿を振り返ると、対話する場面では、相手の話（主張）を聴くことよりもまずは、自分の話（主張）を優先しようとする姿がどの学年においても見られた。そこで、学校生活の中で最も多くの時間を要する授業において、改めて「聴く」ことに注目した授業改善を図る必要がある。子どもが友達の考えを大切にし、比較検討しながら、自分の考えを再構築・深化させる学習を継続することで、論理的思考力を高め、折り合いを付ける力を付けることができると考えた。 また、事前の意識調査では、ア～カの６つの質問項目の中で２項目に数値の落ち込みが見られた。その一つ、「オ　何が大事かに注意して友達の意見を聞いている」では、当てはまると答えた子どもが全体で４６％（新５年４０％、新６年５２％）、どちらかと言えば当てはまると答えた子どもが全体で４５％（新５年４７％、新６年４３％）だった。両者を合わせると肯定的な意見が約９０％であるが、どちらかと言えば当てはまると答えた子どもが多いことから、授業で友達の意見をしっかりと聴いていると自信をもっている子どもが多くないことがうかがえた。友達の意見にしっかりと耳を傾け、友達の意見から学ぼうとする意識をもつ子どもを育成していくことが必要である。 また、「カ　自分の考えを順序よく説明することができる」では、当てはまると答えた子どもが全体で２９％（新５年３１％、新６年２７％）、どちらかと言えば当てはまると答えた子どもが全体で５２％（新５年４７％、新６年５７％）だった。ここでも、約８０％の子どもが肯定的に捉えているが、どちらかと言えばと答えた子どもの割合がとても高い。この事前調査から自分の意見を積極的に発言する子どもが多いものの、順序よく説明することに自信をもっていないことがうかがえた。自分の考えだけでなく、友達の考えのよさも取り入れながら自分の考えを深め、広げていくことで、自分の意見を相手にきちんと伝わるように説明できたと実感できる経験を多くもたせ、自信をもって伝えることのできる子どもを育成していく必要がある。 以上の意識調査からも、友達の意見を主体的に聴き、自分の考えを深め、広げていく子どもの育成が当校の子どもに求められている。

そこで、この研究主題の下、友達の意見を聴くことに注目させながら、自分の考えを論理的に思考させ、自信をもって発言できる子どもを育成したい。そして、落ち込みの見られた「オ　何が大事かに注意して友達の意見を聞いている」と、「カ　自分の考えを順序よく説明することができる」の２つの項目のどちらかと言えば当てはまると答えた子どもを２０％以上、自信をもって当てはまると答えた子どもに変えていきたい。

	当てはまる	どちらかといえば，当てはまる	どちらかといえば，当てはまらない	当てはまらない
ア 学校が楽しい	67%	26%	6%	1%
イ 友達と意見交換するのは楽しい	62%	33%	4%	1%
ウ 授業に主体的に取り組んでいる	52%	41%	6%	1%
エ 授業がよく分かる	65%	29%	4%	2%
オ 何が大事かに注意して友達の意見を聞いている	46%	45%	9%	0%
カ 自分の考えを順序よく説明できる	29%	52%	17%	2%





研究の内容

○「双方向に聴き合う姿」を意識した授業づくり

本研究では「聴く」という行為を、国語科にとどまらず、全ての教育の始源であり、聴く力が育たないところに教育の効果は期待できないという考えで、各教科・領域の授業づくりに取り組む。なお、本研究では、「授業には、『一方向に聞く姿』と『双方向に聴き合う姿』がある」とし、「双方向に聴き合う姿」に特に注目する。

双方向に聴き合うことで、次のような効果が期待できるからである。まず、聴き手にとっては友達の考えの根拠（よさ）に触れることで自分の考えを強化したり、折り合いを付けたりすることができ、自分の考えをよりよいものへと修正し、自信をもつことができる。このとき、子どもは友達の考えの根拠（よさ）を基に論理的に思考する。また、話し手にとっては、友達に理解してもらえるように友達の考えにかかわらせながら話し、友達が自分の考えに共感することで、伝えて分かってもらえた喜びを感じることができる。

このような効果が期待できる双方向に聴き合うやりとりを行う中で、課題を解決し、学習のねらいに迫っていくことが授業において大切だと考える。

つまり、双方向に聴き合う姿とは、課題解決に向かって、主体的に互いの考えを聴き合う中で、互いの考えの根拠（よさ）は何かと論理的に思考し、互いの考えを深め、広げていく姿である。

その際、互いの考えの根拠（よさ）を基に考える子どもは、考えを強化したり、折り合いを付けたりしたことを、「だから」「なぜなら」「たとえば」「つまり」「このように」などの接続詞を取捨選択して話したり、書いたりする姿になるであろう。

検証のため、その接続詞に注目して、研究を進め、論理的思考力を鍛えていく。

なお、本研究においての論理的思考力とは、双方向で聴き合う中で互いの考えの根拠（よさ）に注目し、各教科・領域の見方や考え方を働かせて自分の考えを整理し、深化・再構築していく力と定義する。

また、新潟小学校では生活科と総合的な学習の時間において子どもたちを持続可能な社会の担い手に育成することを目指し地域と連携・協働した学習活動（地域教育プログラム）を推進している。地域の人、もの、ことに触れることで、他教科の学習で蓄積された知識を基に論理的思考力を発揮させることができる。ここでは、各教科で論理的思考力を鍛える場面と、生活科と総合的な学習の時間の情報を整理・分析する際に論理的思考力を発揮する場面の２つに分けられる。本研究はこの２つの場面における子どもの姿を研究対象とする。そこで、この２つの場面において子どもが考えの根拠（よさ）を基に双方向に聴き合うことに焦点を当てて手立てを講じ、論理的思考力を鍛え、発揮する授業を展開できるようにする。ここでの具体的な手立てとしては、大きく２点考えられる。１つめは、カリキュラムマネジメントの観点をもっての単元構成の工夫である。学校の教育課程や各教科・領域で育成する資質・能力、見方や考え方を見据えて単元全体の展開を工夫し、単元の「ここでこそ」という双方向に聴き合う姿が発揮できる場面を設定する。２つめは、一人では解決できない良質な課題提示の工夫、子どもの意見の採り上げ方や意見のまとめ方の工夫、考えを明確にするワークシートやホワイトボードの工夫など双方向に聴き合う姿を直接促す、つまり聴く必然性をもたせる手立てである。

研究内容は、「双方向に聴き合う姿を意識した授業づくり」を中心として行うが、その研究を進める上でのベースづくりとして次の２点も日頃から大切にしていく。

（１）「新小ユニバーサルデザイン」による学習環境づくり

平成 26 年度から「新小ユニバーサルデザイン」の取組を生徒指導部の牽引により、全校体制で進めてきた。「新小ユニバーサルデザイン」は「①学習環境」「②学級づくり」「③授業」という３つの観点からその設定がなされている。

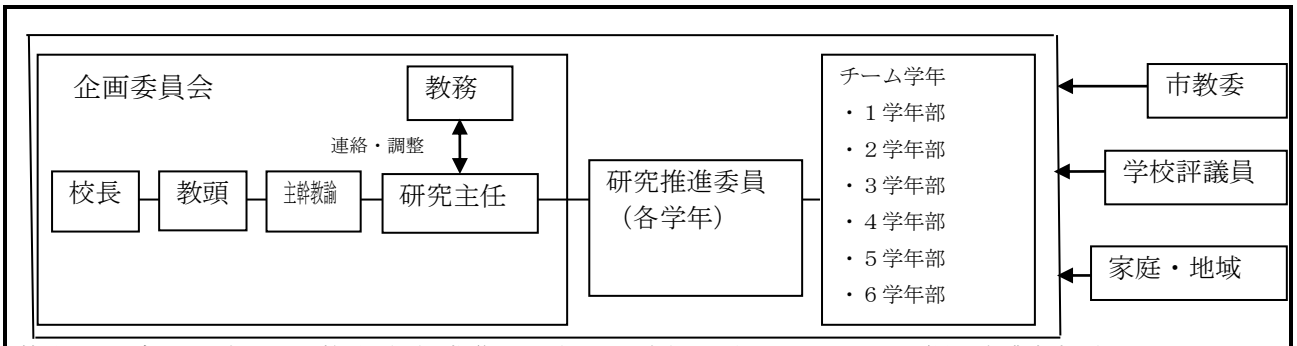
本研究では、視覚支援等「新小ユニバーサルデザイン」の取組を確かに位置付けた学習環境づくりをより一層進めていくとともに、聴くことや論理的に考えることへの効果を明らかにする。

（２）「学級力アンケート」、「学級力向上タイム」に注目した学級づくり

平成 25 年度から全校体制による「学級力アンケート」「学級力向上タイム」の取組を進めてきた。本研究では、「聴く」ことについて、「学級力アンケート」で意図的に子どもに振り返らせるとともに、聴くことに関する取組を考えさせ、「学級力向上タイム」において実行する。そうすることで、支持的な学級風土を醸成し、「聴くことのできる学級集団」となるための取組を全学級で進めるようにする。こうした取組を蓄積し、「学級力アンケート」、「学級力向上タイム」による効果を明らかにする。

今年度は「学級力」の項目の見直しを図る。「聴くマナー」や「聴くスキル」などの話をつなげる力を細分化し、支持的風土づくりについての項目を中心に、日々子どもに意識させていく。

３　研究体制等



校長のリーダーシップのもと、教頭・主幹が指導助言を行い、研究主任が中心となり、チーム学年で授業実践を行う。

4　研究計画

	実施時期	研究内容，研究方法，成果の公開等	期待される成果等
平成29年度	一学期	・研究全体会 ・授業研究開始 ・大研→全体授業研究会（２つの学年で） 新潟市教育委員会指導主事を指導者として招聘し、「双方向に聴き合う姿」を視点とした授業づくりについて協議する。 ・小研→各学年部による授業研究会（２つの学年で）	・低、中、高学年ごとに設定した「聴くマナー」「聴くスキル」を習得し、根拠を基に聴き合い、友達と積極的にかかわる。
	二学期	・大研→全体授業研究会（４つの学年で） 新潟市教育委員会指導主事を指導者として招聘し、「双方向に聴き合う姿」を視点とした授業づくりについて協議する。 ・小研→各学年部による授業研究会（４つの学年で） ・ＣＲＴ学力検査（全学年） ・授業づくり研修会 新潟大学附属新潟小学校教諭を指導者として招聘して、論理的思考力についての研修を行う。 ・研究全体会 １年間の成果と課題を明らかにする。 ・実践を冊子にして近隣の小学校へ配付する。	・低、中、高学年ごとに設定した「聴くマナー」「聴くスキル」を活用して友達と積極的にかかわり、自分の考えを深める。 ・ＣＲＴ学力検査において、各学年が前年度の結果を上回る。 ・意識調査のオとカで「当てはまる」と答えた子どもの割合が１学期より高くなる
平成30年度	一学期	・研究全体会 ・授業研究開始 ・大研→全体授業研究会（２つの学年で） 新潟市教育委員会指導主事を指導者として招聘し、「双方向に聴き合う姿」を視点とした授業づくりについて協議する。 ・小研→各学年部による授業研究会（２つの学年で）	・低、中、高学年ごとに設定した「聴くマナー」「聴くスキル」を活用して根拠を基に聴き合い友達と積極的にかかわる。 ・全国学テのＢ問題において、前年を上回る。
	二学期	・新潟市内の小学校１０７校の研究主任を対象に公開授業及び協議会を行う。６年生「総合的な学習の時間」 新潟市教育委員会指導主事を指導者として招聘し、「双方向に聴き合う場」を視点とした授業づくりについて協議する。 ・大研→全体授業研究会（３つの学年で） 新潟市教育委員会指導主事を指導者として招聘し、「双方向に聴き合う姿」を視点とした授業づくりについて協議する。 ・小研→各学年部による授業研究会（４つの学年で） ・ＣＲＴ学力検査（全学年） ・授業づくり研修会 新潟大学附属新潟小学校教諭を指導者として招聘して、論理的思考力についての研修を行う。 ・研究全体会 ２年間の成果と課題を明らかにする。 ・実践を冊子にして近隣の小学校へ配付する。	・低、中、高学年ごとに設定した「聴くマナー」「聴くスキル」を活用して友達と積極的にかかわり、自分の考えを深める。 ・ＣＲＴ学力検査において、各学年が前年度の結果を上回る。 ・意識調査のオとカで「当てはまる」と答えた子どもの割合が１学期より高くなる

5　研究のまとめの見通し

・各学年で大研１本と小研１本ずつを実施し、協議会を行って成果と課題を共有する。
・研究授業における子どもの姿と、「振り返り」の場で書いた子どもの記述における接続詞の活用から検証する。
・新潟市教育委員会指導主事を招聘し、指導・助言を基に成果・課題を検証する。
・意識調査の結果から分析する。
・全国学力学習状況調査の児童質問紙の結果から分析する。